

新たな学習機会の探求

——二三朋子著『接触場面における共生的学習の可能性

—意識面と発話内容面からの考察—』—

脇坂 真彩子

【キーワード】 動的情報、 社会型日本語教育、 共生言語、 発話者の心理

0. 書籍の概要

二三朋子(2002)『接触場面における共生的学習の可能性』風間書房 全 188 ページ、7560 円(税込)
ISBN : 4-7559-1344-0

1. 本書の概要

本書は二三朋子氏が 2001 年 3 月にお茶の水女子大学に博士号の学位論文として提出、受理された後、2002 年 11 月に出版されたものである。

近年、日本における在留外国人の急増により、日本語教育分野においても学校型日本語教育から社会型日本語教育への転換が求められている。従来の学校型日本語教育では、外国人に日本語を教えることが主目的であり、日本語は目標言語であった。しかし、社会型日本語教育を機能させるためには、教室内だけを日本語学習の場として狭く限定するので

はなく、教室外をも日本語教育の場として捉え、利用する視点が必要となってきた(図 1 参照)。本書において二三氏は、この社会型日本語教育の指針となるのが共生的学習の概念であると主張する。共生的学習が成立すれば、接触場面での会話が母語話者同士の会話とは違う方略を持つものとなり、外国人・日本人双方がその方略を学ぶことができる場(=共生的学習が可能である場)となると述べる。なぜならば、接触場面において日本語が共生言語として機能するとき、会話内容は母語話者同士の会話とは違う方略を持つものとなり、日本人と外国人が共に会話を調整しつつ作り上げていく動的なものとなるからである。

本書は数年前に発行されたものであるが、当はまだ概念のレベルに留まっていた共生的学習を、具体的に捉えようとした点で注目すべき書籍である。

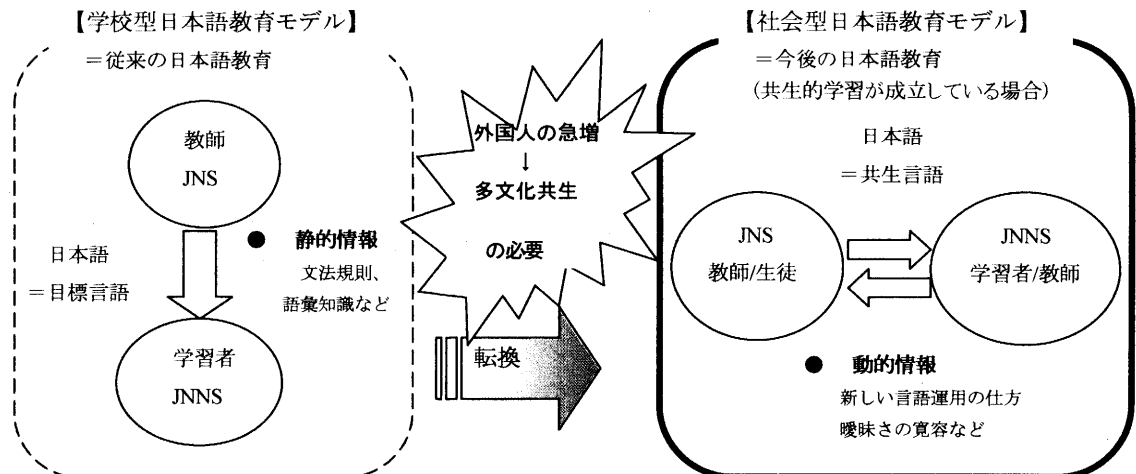


図 1 社会型日本語教育への転換

2. 研究概要

共生的学習の概念は近年注目を浴びてきたものの、何が学習されるのか、どのように実現していくのかなど具体的なことは殆ど明らかにされてこなかった。そこで、本研究では今後の社会型日本語教育の指針となるであろう「共生的学習」の概念について、さらに具体的に捉えることが課題とされた。共生的学習の具体的なリソースを「動的情報」と規定し、その詳細を具体的に記述することで、共生的学習の可能性の解明を試みている。

2.1 「動的情報」とは

ここで、まず本研究で鍵となる「動的情報」について説明したい。「動的情報」とは共生的学習で学習される対象である。本研究では、岡崎(1998,1999)の学習対象としての情報に関する「静的情報」「動的情報」という枠組み¹を援用し、共生的学習とは、動的情報そのものだと規定されている。接触場面での日本語母語話者(以下 JNS)と日本語非母語話者(以下 JNNS)のやり取りでは、ある困難が生じた場合、双方は既存の認知や実践の枠組みとは異なる枠組みの存在に気づき、その食い違いを調整し、受け入れ、自分の枠組みに付加していく。それゆえ、本書では共生的学習の下で学習されるのは静的情報ではなく動的情報であるという立場から検討を行い、その記述が試みられている。

2.2 研究課題

従って、共生的学習の側面を具体的に捉えることは、すなわち動的情報を記述することだと言い換えられる。これが本研究の1つ目の課題である。本研究において検討された動的情報の側面は、① JNS と JNNS の意識面の違いを捉えること(研究1・2)、② JNS・JNNS の実際の発話内容の特徴を包括的に捉えること(研究3・4)、③ 発話内容を相互作用面から分析すること(研究5)という3点である。この3つの側面を扱った理由に関しては、これまでの第二言語習得分野、日本語教育分野での研究および応用理論の先行研究を基に決定されている。

その上で、第2の課題としてさらに共生的学習を具体的に捉えるため、話者の内面(認識および意識)と個々の言語的現象の関連を明らかにすることが試みられている(研究6・7)。これは、応用理論の分野において、なぜフォーリナートークが使われるのかが、話者の意識面との関連から説明された(Zuengler: 1991)ことを背景にしている。

以上の2点が本研究の研究課題である。研究の全体の概要を下記図2に示す。

検討項目	データの扱い	研究	調査方法	対象(人)	分析方法	
意識面	JNS と JNNS をそれぞれ分析	研究1	質問紙調査1	JNS 103人	因子分析 (p48・60)	
		研究2	質問紙調査2	JNNS 100人	分散分析 (p51・65)	
発話内容面	JNS と JNNS をそれぞれ分析	研究3	会話録音	JNS 48人	発話カテゴリー(p79)分散分析	
		研究4		JNNS 24人		
発話内容(相互作用面)	JNS と JNNS の相互作用を分析	研究5		JNS-JNNS 24組	会話分析【隣接対】(P101)	
発話内容 と内面の 関連	認知との関連	研究6	会話録音	質問紙調査3	JNS 48人	重回帰分析(p113) ウェルチのt検定
	意識との関連	研究7				

【図2】研究概要 一二三(2002:p33 図2-1)を基に筆者作成

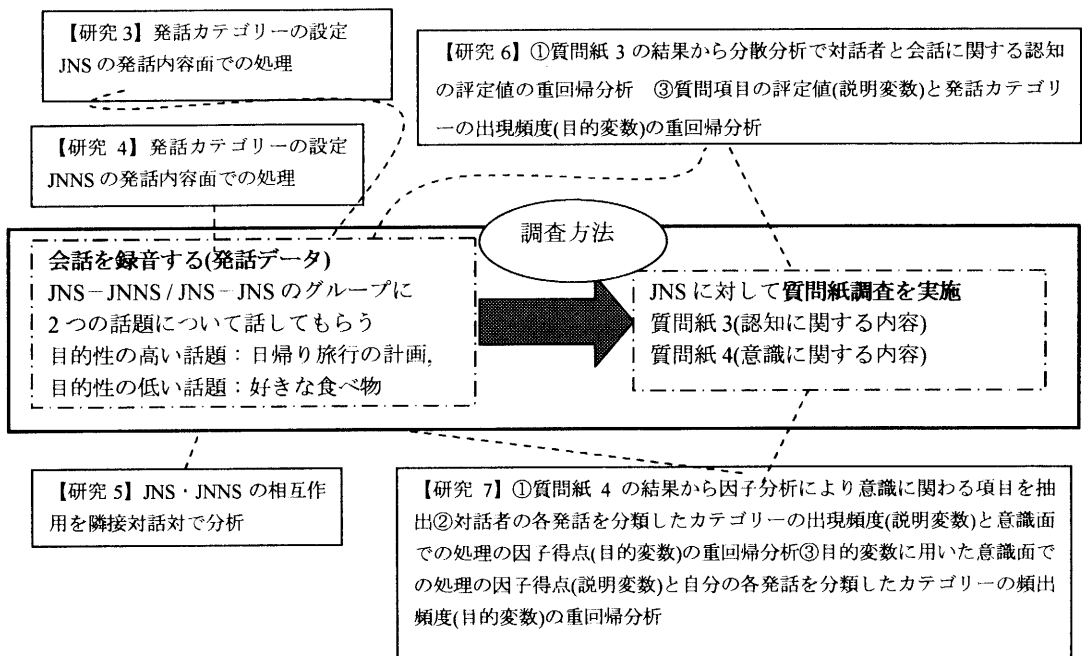


図3 調査・分析方法(研究3~7)一二三(2002: pp.75-132)を基に筆者作成

また本研究は、従来の会話分析に新たに心理学的手法を取り入れ、収集した大量のデータを複合的に組み合わせ、統計的分析を行っているところに大きな特徴がある。本研究の調査、分析方法を上記図3に整理しておく。本研究は方法論についても会話分析における量的手法のあり方を提起していることに注目されたい。

次章からは、本研究のそれぞれの調査の分析結果を中心に要約し、紹介したい。

3. 動的情報の記述【研究1~5】

本研究の前半では共生的学習の下で学習される動的情報が話者の意識面と発話内容面(包括的および相互作用的)という側面から記述されている。アンケート調査により、接触場面におけるJNSおよびJNNSの会話に対する意識には、下記図4のような違いがあることが明らかにされた(研究1・2)。また、接触場面か母語話者場面かでその意識が変動していることも示された。次に、発話内容面での処理の検討については、発話データを発話カテゴリー²

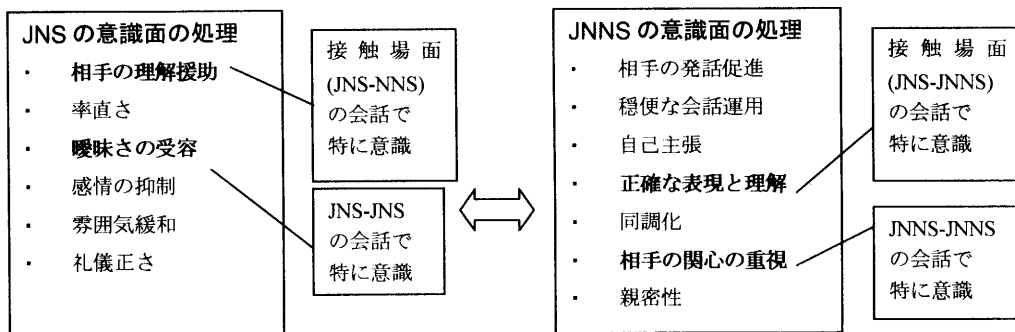


図4 意識面での処理：JNS⇔JNNSの比較一二三(2002:pp.41-74)を基に筆者作成

に分類し、会話全体を分析することにより、発話の特徴を包括的に捉えている(研究 3・4)。発話における単語数において JNNS は JNS よりも単語数が少なく短い発話であること、また、発話データに見られた発話カテゴリーの出現頻度は JNS と JNNS によって違いがあることが示された(表 1 参照)。接触場面の対話において JNS と JNNS は違う対応をしているということである。

【表 1】各発話カテゴリー出現頻度
一二三(2000:pp.83-97)より筆者作成

話者 発話カテゴリー	JNS	JNNS
情報要求(Q)	少	多
情報提供(INF)	多	少
意味交渉 (NM)	少	多
自分の意見 (OP)	多	少
相手の評価 (EV)	多	少

さらに、同じ発話データから、発話カテゴリーの隣接対応³を分析した結果、話者の違い及び対話者の違いによって発話内容が違っていることが示された(図 5 参照)。つまり、相互作用を通じて、話者は対話者の発話から何らかの影響を受けつつ自分の発話を調整していることが明らかにされた。

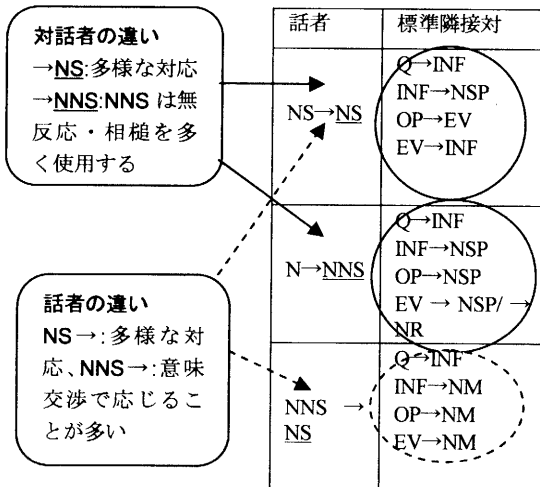


図 5 隣接対応対

一二三(2002:pp.103-107)より筆者作成

4. 動的情報の生成過程 (研究 6~7)

さらに、本書の後半では、共生的学習が成立す

る場合の JNS の心理に焦点化し、個々の発話が JNS の内面とどのように関連し、生成されているのかを具体的に解明することが試みられている。人の発話行動に影響を与えると考えられる話者の内面処理は、対話者および発話に関する認知と、会話について話者が持っている構造化された知識(=意識)の2つだと考えられる。そこで研究 6,7 では、接触場面において日本語母語話者の持っている認知面(研究 6)及び意識面(研究 7)と個々の発話内容との関連を明らかにするために、重回帰分析が行われる。

下に統計的分析の結果を簡略化した図を載せ、説明する。実際の図は本書 p118, 129 を参照されたい。

まず、対話者の認知と発話内容の関連は図 6 のように示される。例えば、JNS は JNNS の発話に「情報提供」や「評価」が多いと「相手の知識量」が多いと判断し、JNNS への「情報提供」を少なくする。また JNNS の発話に「相槌」が多いと、その話題に関して、「相手の知識量」は少ないと判断され、JNNS への「情報提供」を多くする。以上の手続きの繰り返しにより、対話者(JNNS)の発話が話者(JNS)の文脈認知にどのような影響を与え、さらにその認知が話者(JNS)自身の発話行動にどのような影響を与えるかというプロセスが明らかにされている。

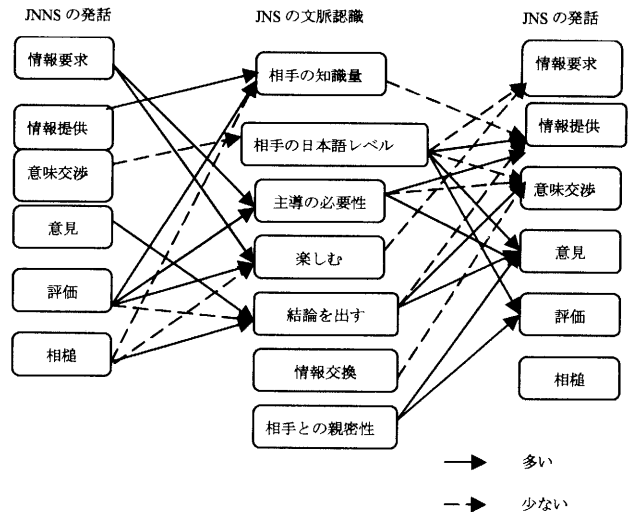


図 6 発話内容と認知

一二三(2002:p118)より筆者作成

また、話者の意識面と発話内容の関連は、分析の結果、図 7 のように説明されている。例えば、JNNS の発話に「情報要求」や「評価」が多いときは、

JNSは積極的に「自己表現」をし、その結果 JNNS への「情報提供」や「評価」を活発に行い、会話を楽しくしようと意識する。その反面、「情報要求」や「意味交渉」を少なくする。以上のような手続きにより、対話者(JNNS)の発話が話者(JNS)の意識にどのような影響を与え、さらにその意識が話者(JNS)自身の発話行動にどのような影響を与えるかという過程が明らかにされている。

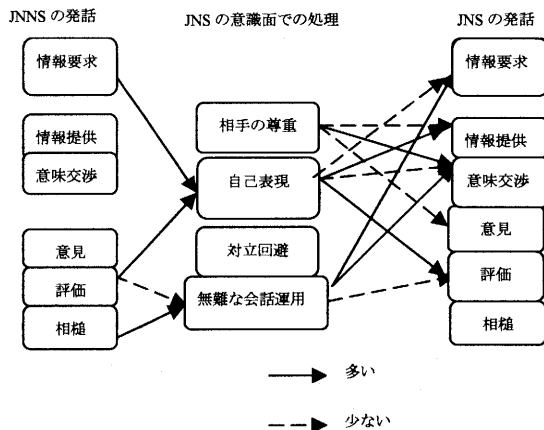


図7 発話内容と意識
一三三(2002:p118)より筆者作成

5. 終わりに

本研究の意義は、接触場面の一側面を捉え、共生的学習という、社会型日本語教育を捉える枠組みの1つを提示したことにある。また、従来の会話分析に新たに心理学的手法を取り入れ、大量のデータを基に統計処理を駆使し、話者の発話行動を引き起こす内面処理の過程を客観的に捉えることを試みているという点で、価値があると考えている。

本研究により、日本語教育において、これまで無意識に行われていた学習過程や学習内容を意識的に行うことが、教室外の学習の可能性を広げる手がかりとなるという提案がなされた。また、共生的学習の下での日本語教員は専門的知識のない地域社会の住民すべてを結びつけるネットワークの役割

が期待されることが述べられている。

今後の課題としては、第一に被験者とする JNS の専門知識の有無の検討、第二に共生的学習で学習される日本語そのものの検討、第三に、今回扱われなかった JNNS 同士の場面の発話内容面の処理の検討の3点が挙げられている。以上の諸点を踏まえ、接触場面における共生的学習の可能性が縦断的かつ横断的に研究されることを期待したい。

謝辞 本書はお茶の水女子大学 2007 年度「第二言語習得演習」ゼミで検討した文献です。ご指導下さった佐々貴義式先生及び同ゼミの皆様にご心より感謝申し上げます。

注

- 岡崎(1998,1999)の静的情報では「単一の認知や実践の枠組みのなかでやり取りされる情報」(p14)、動的情報は「異なる認知・実践の枠組みの間同士でやりとりが行われる情報」間同士でやりとりが行われる情報」(p14)と定義される。
- 情報要求(Q)、情報提供(INF)、意味交渉(NM)、意見(OP)、評価(EV)
- 隣接対を単位とした分析とは、全ての発話について、次にどのような発話が続くかを分析する方法である(一二三, 2002;101)

参考文献

- 岡崎敏雄(1998)「ボランティア教授者のネットワークの成長のダイナミズムの研究:評価とディスコースを焦点として」『日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究 報告書』日本語教育学会編
- 岡崎敏雄(1999)「日本語教育の課題と方法 ボランティア教授者ネットワークの記述的研究の場合」『日本語教育の展開』溪水社
- Zuengler, J. (1991) Accommodation in native-nonnative interactions: Going beyond the "what" to the "why" in second-language research. In H.Giles, J.Coupland, & N.Coupland(Eds.), Contexts of Accommodation: Developments in Applied Sociolinguistics. Cambridge: Cambridge University Press. pp.223-244